

富士養鱒場だより

第250号
令和3年8月号



静岡県水産・海洋技術研究所富士養鱒場 〒418-0108 富士宮市猪之頭 579-2 TEL:0544-52-0311

FAX:0544-52-0312 E-mail suigi-fuji@pref.shizuoka.lg.jp URL <https://fish-exp.pref.shizuoka.jp/fuji/>

富士養鱒場だより 250 号を記念して

富士養鱒場だよりが昭和 43 年 1 月に創刊されてから半世紀以上の歳月が流れ、ここに 250 号を発行することになりました。創刊号をみてみますと、年 1 回の事業報告では情報をタイミングよくお知らせすることができないため年 6 回の発行とし、内容も軽い形式にして気安く親しんでもらうため「だより」という形式にしたと記されています。以来、本誌は富士養鱒場と業界を身近に結ぶ情報誌として、研究成果だけでなくその時々の特ピックス等を掲載してまいりました。現在は年 4 回の発行としておりますが、発行と同時にホームページにもアップして速やかな情報発信を心がけております。

200 号記念号の発行が平成 21 年 1 月でしたので、この 12 年間の歩みをふりかえてみますと、もっとも多い記事は魚病関係で、毎年実施しているサケ科魚類・海面養殖の生産実態及び魚病被害のアンケート調査のほか、ガス病の発生とその対策、防疫対策等について情報発信してき

ました。また近年業界と共に力を入れてきたものに、大型ニジマスのブランド化にむけた取り組みがあります。本誌でも大型魚の色揚げ、全雌三倍体の品質向上、脂の乗りの評価、高鮮度維持のための締め方、高密度輸送法など関連する技術開発の成果を発信してきました。内水面漁業については、平成 18 年よりサケ科魚類に加えアユ・ウナギも含めた内水面漁業全般の調査研究を富士養鱒場がうけもつこととなり、海域におけるアユ仔稚魚の調査結果、ダム湖の水面有効利活用、アユ遊漁者の満足度調査、小河川におけるウナギ稚魚の成長と移動などを情報発信しています。従来と比べ、取り組みの幅が広がった 12 年間でした。

201 号からの目次を以下にまとめました。これからも発刊から続く趣旨を大切にして、迅速かつ適切な情報の発信を心がけて参ります。今後とも「養鱒場だより」を末永くご愛読くださるようお願いいたします。（野田浩之）

総合目次（201 号から 250 号まで）

発行年	月	号	題 名	著者名
2009(H21)	1	201	沼津市西浦地区の小河川周辺海域におけるアユ仔稚魚の調査結果	後藤裕康
	4	202	ロングフィンニジマスの誕生	後藤裕康
			平成 20 年サケ科魚類の生産と魚病被害の状況	岡田裕史
	7	203	沼津市戸田地区におけるアユ仔稚魚の調査結果	後藤裕康
10	204	ニジマス大型魚の加工歩留まり	川嶋尚正	
2010(H22)	1	205	沼津市戸田地区におけるアユ仔稚魚の調査結果 2	鈴木邦弘
	4	206	平成 21 年サケ科魚類の生産と魚病被害の状況	岡田裕史
	7	207	太田川ダムの水面有効利活用へ向けて	岡田裕史
	10	208	受精のタイミング	川嶋尚正

発行年	月	号	題 名	著者名
2011(H23)	1	209	興津川のアユ遊漁者アンケート調査結果（平成 22 年度）	鈴木邦弘
	5	210	就任にあたって	田中 眞
			平成 22 年サケ科魚類の生産と魚病被害の状況	岡田裕史
	8	211	アスタキサンチン投与による色揚げ効果	川合範明
			富士養鱒場にマスコットキャラクター「マスオ君」登場	鈴木邦弘
11	212	カワシオグサ繁殖状況調査	鈴木勇己 鈴木邦弘	
2012(H24)	2	213	興津川のアユ遊漁者アンケート調査結果（平成 23 年度）	鈴木勇己 鈴木邦弘
	5	214	就任の御挨拶	増元英人
			平成 23 年サケ科魚類の生産と魚病被害の状況	松山 創
			静岡県下におけるアユの天然遡上と種苗放流の現状	鈴木邦弘
	8	215	太田川ダム水面利活用調査の結果概要	鈴木邦弘 岡田裕史
11	216	静岡型ドナルドソン・にじますの品質評価	川合範明	
2013(H25)	2	217	興津川のアユ遊漁者アンケート調査結果（平成 24 年度）	鈴木勇己 鈴木邦弘
			「ニジマス PR 大使創出作戦」の成果と今後の課題	鈴木邦弘 松山 創
	5	218	平成 24 年サケ科魚類の生産と魚病被害の状況	松山 創
	8	219	ニジマス販売拡大に向けた新たな出荷サイズの検討	松山 創
	11	220	興津川におけるアユの産卵実態	鈴木邦弘 鈴木勇己
2014(H26)	2	221	富士養鱒漁協の大型ニジマスのブランド化の推進支援	鈴木邦弘 松山 創
	5	222	就任の御挨拶	平井一行
			平成 25 年サケ科魚類の生産と魚病被害の状況	佐藤孝幸 松山 創
	8	223	さけます類における全雌三倍体の品質向上に向けて	木南竜平
	11	224	内水面漁業の振興に関する法律が制定されました	鈴木邦弘
2015(H27)	2	225	アマゴの全雌生産を支える偽雄化技術の再検証	鈴木邦弘
	5	226	富士宮市内でのニジマスの利用状況	鈴木邦弘
			平成 26 年サケ科魚類の生産と魚病被害の状況	佐藤孝幸
	8	227	長寿なアユ	鈴木邦弘
	11	228	小河川におけるニホンウナギ稚魚の成長と移動	鈴木邦弘
2016(H28)	2	229	大型ニジマスにおける脂の乗りの測定法	木南竜平 佐藤孝幸
	5	230	平成 27 年サケ科魚類の生産と魚病被害の状況	佐藤孝幸
	8	231	高鮮度を保持する大型ニジマスの締め方	鈴木基生 鈴木邦弘
			淡水魚から見た静岡県の多自然川づくり	鈴木邦弘
2017(H29)	2	232	冷水病の卵内感染防除のための「受精卵の吸水前消毒」	佐藤孝幸
	5	233	加藤正利氏・全国漁業者交流大会で水産庁長官賞受賞	鈴木邦弘
	8	234	平成 28 年のサケ科魚類・海面養殖の生産実態 及び魚病被害のアンケート調査結果	佐藤孝幸
	11	235	富士川の上ヶ郷堰魚道に関する評価	鈴木邦弘

発行年	月	号	題 名	著者名
2018(H30)	2	236	“水辺のこわざ”を用いた魚道改修の提案	鈴木邦弘
	5	237	平成 29 年のサケ科魚類・海面養殖の生産実態 及び魚病被害のアンケート調査結果	木南竜平
	8	238	産業管理外来種であるニジマスの適切な取り扱い	鈴木邦弘
			水産用抗菌剤の取り扱いが変わりました	木南竜平
11	239	興津川のアユ釣りのレクリエーション価値は“●億円”	鈴木邦弘	
2019(H31)	2	240	富士養鱒場の雨と湧水の関係について (H9-30)	鈴木邦弘
2019 (R1)	5	241	新元号“令和”の始まりとともに	平井一行
			平成 30 年のサケ科魚類・海面養殖の生産実態 及び魚病被害のアンケート調査結果	木南竜平
	8	242	ニジマス中間種苗の高密度輸送方法の検討	松山 創
	11	243	富士川支流にアユはどれくらい生息しているのか	鈴木邦弘
2020 (R2)	2	244	これまでの「養鱒業若手研修会」を振り返る	木南竜平
			川魚は台風による増水で死亡する（ことがある）	鈴木邦弘
	5	245	富士養鱒場長・就任にあたって	野田浩之
			平成 31 年・令和元年のサケ科魚類・海面養殖の 生産実態及び魚病被害のアンケート調査結果	池田卓摩
			8	246
11	247	富士養鱒場管内のコロナ禍の影響について	佐藤孝幸	
2021 (R3)	2	248	令和 2 年梅雨の大雨による湧水量増加とガス病の発生	池田卓摩
	5	249	令和 2 年のサケ科魚類・海面養殖の生産実態 及び魚病被害のアンケート調査結果	池田卓摩
	8	250	富士養鱒場だより 250 号を記念して	野田浩之

富士養鱒場と関係業界のこれからの 12 年

201 号から 250 号までに 12 年の時間が経過しました。この間、関係業界の情勢を観察・分析し、当場の研究や普及支援等の取組を指揮して

きた歴代場長の中から、増元氏と平井氏のお二人へ、当场勤務の思い出話とともに“これからの 12 年”に向けたメッセージをお聞きしました。

増元英人	(平成 24, 25 年度の 2 年間在籍、令和 2 年 3 月静岡県退職、 現在は静岡県水産加工業協同組合連合会・専務理事)
------	--

富士養鱒場だよりは、昭和 43 年 1 月に第 1 号が発行されて今回で 250 号を迎えるということで、富士養鱒場に関わった者として、外から見た養鱒業について何か書いてもらいたいと依頼をもらいました。

私は平成 24, 25 年の 2 年間、場長として勤務いたしました。場内にある官舎での単身赴任の暮らしは、猪之頭のおいしい水と野菜、美しい自然と富士山に彩られ、とても楽しいもので

した。冬の寒さはとても厳しかったのですが、焼津生れ・焼津育ちの私には、「雪が積もる」ことが珍しく、なかでも平成 26 年 2 月の大雪は忘れられない思い出です。

当時の富士養鱒場では、河川におけるウナギの生態とアユ釣りの経済効果についての研究を進める一方で、次の研究課題として、県の競争的資金である新成長戦略研究課題で大型ニジマスの量産化に関する研究費獲得に向けて準備

を進めていました。この大型ニジマスの研究は無事予算が獲得でき、関係職員の努力により平成 31 年度までの 6 年間の研究の成果が知事表彰を受けています。

私は令和 2 年 3 月に県を退職し、現在は静岡県水産加工工業協同組合連合会にお世話になっております。仕事柄、水産加工業や食品衛生といった分野の情報に触れる機会が多いわけですが、現在、水産加工業者の皆さんの大きな関心事に食品衛生法の改正があります。

改正食品衛生法は令和 3 年 6 月から施行され、HACCP が制度化された他、営業許可区分の見直しにより、これまでは営業許可が不要であった様々な水産加工品、例えば燻製や干物なども『水産製品製造業』の許可が必要となりました。一方で、『水産製品製造業』の許可があれば「鮮魚」の販売が可能となっています。また、これまでは取扱が不明確であった、漁業者（＝養殖業者）が行う水産物の「洗浄」「活〆」「放血」「頭・内臓・鱗除去」「冷蔵・冷凍」等は“採取業の範囲”として認められています。

養鱒業界では 6 次産業化の取組を進めている方も多かったと思いますが、甘露煮や燻製などを製造する場合は『惣菜業』の許可を取得していると思います。今回の改正では、現在の営業許可の有効期間が切れる際に、該当する営業許可に新規登録となるようです。その際は『惣菜業』のままでも、『水産製品製造業』への変更で

も良いようですが、『水産製品製造業』ならばフライや切身、刺身の販売も可能となりますので、ご自分の営業形態を考慮して保健所と相談するのが良いと思われます。

今、世間の大きな関心事である新型コロナウイルス感染症は、水産加工業界にも大きな影響があり、飲食店向けや土産物向けの商品の出荷は大きく減少する一方で、量販店向け商品などは、堅調に推移しています。これは養鱒業に携わる皆様も同様だと思えます。そして、この新型コロナウイルス感染症の収束に関する見通しは立っていません。コロナ禍前は、国・県を挙げて交流人口の増加とインバウンド需要への対応を施策としていましたが、コロナ禍収束の見通しが立たない現状ではいずれも難しいものとなっております。コロナ禍前に戻るのかとの不安もあります。

養鱒業に携わる皆様は、生産ロスの削減のため、これまでに様々な取り組みをされてきたことと思います。なかでも 6 次産業化はその代表だろうと思いますが、コロナ禍により先が見通せない中で法制度への対応を迫られるなど、大変困難な状況が予想されます。

アフターコロナを見据えつつ、育てた魚を誰に・どのように売るのが、そのために何が必要となるか、経営戦略を改めて熟慮し、この困難な状況を乗り切ってもらいたいと願っています。
(増元英人)

平井一行	(平成 26 年度～平成 31 年度の 6 年間在籍、令和 2 年 3 月静岡県退職、現在は再任用にて静岡県環境衛生科学研究所勤務)
------	--

養鱒振興一考：個人的には何度も訪れたことがあった富士養鱒場ですが、平成 26 年 4 月に初めて赴任し、以降 6 年間勤務いたしました。その間、毎日、富士山の雄大な姿を眺め、富士山の冷たくすっきりとした伏流水を飲み、富士山麓の森のいぶきを感じる空気を深く吸って過ごしました。また、標高 700m を超える位置にあることもあって、とても近くに見える星空、底冷えが厳しく長い冬、涼しくて快適な短い夏、さらに春から夏にかけて咲き誇る花々や、ちょ

っと変わった山菜や木の実や虫など、大自然を享受させていただきました。

このように富士養鱒場周辺の富士宮市猪之頭地区には、富士山の恵みを受ける稀有な自然環境があり、同時に、豊富に得られる冷たい湧水を利用して養鱒業が営まれてきました。

富士養鱒場に在職中に一般の方から「どこに行けばニジマスを食べることができますか？」と電話で問い合わせを受けたことが何度もあり

ました。隣にある「猪之頭公園運営協議会が運営する食事処『鱒の家』で食べられますよ。」と答えたかったところですが、休業のため、「〇〇などで食べられると思います。」などと歯切れの悪い答えをしたことを覚えています。

今となっては、このニジマス料理の象徴的な食事処『鱒の家』の再開に向けて、養鱒業が盛んな猪之頭地区に来れば美味しいニジマス料理を食べられることのみをPRするのではなく、稀有な自然環境を無二の観光資源ととらえ、それらを楽しみながら特産であるニジマスも食べられることを前面に出しながら対処すべきであったと回想しております。

また、富士宮市で生産されるニジマスは首都圏や中京圏に多く出荷されていますが、今後とも観光業との連携をより強化することで、富士宮市に観光で訪れる一層多くの皆様方にその美味しさを知ってもらえることができれば、大都市圏における富士宮産ニジマスへのニーズも高まり、他県産のニジマスとの国内競争の面で優位性を築く力となるやもしれません。

一方、近年、全国で海面養殖や陸上養殖によりサケ類が大量に生産されるようになり、それらへの対応も求められているところでもあると思われます。富士山の恵みの中で営まれる静岡県の養鱒業を差別化して競争・対抗することも重要とは思いますが、サケ類の海面養殖や陸上養殖において必要とする種苗の生産供給基盤として、それらと共存する方向についても検討することも必要ではないかと思えます。

在職中に富士養鱒場では低魚粉飼料でも成長が良く IHN にも強いニジマスや、海水馴致能の高いニジマスの生産技術開発研究などを行っていましたが、それらの研究成果も多いに活用される局面になっているものと思えます。

需要動向など静岡県の養鱒業を取り巻く情勢が刻々と変化する中で、観光業を含む異業種の方々や養鱒業者、そして、富士養鱒場職員が緊密に連携しながら課題を解決し、その将来を切り拓いて行かれることを遠くから期待しております。
(平井一行)

トピックス

令和3年度・養鱒研修会を開催

令和3年6月28日に会場主催の養鱒業者向け研修会「養鱒研修会」を開催しました。近年は12月開催でしたが、昨年度はCOVID-19感染防止のため中止としたので、今年度は早い時期に開催しようと変則的に6月の開催となりました。

今回は、富士養鱒場が平成26年から6年間取り組んだ大型ニジマスに関する研究から、新品種作出技術や鮮度管理技術などの研究成果の紹介を行いました。今回紹介したものの一部（鮮度管理・高密度輸送）は、冊子『あたらしい水産技術』にとりまとめ水技研ウェブサイトで公開していますので、ぜひご活用ください。



講演の様子

(佐藤孝幸)

題目	講師
1. 大型ニジマスに関する研究成果について	水技研富士養鱒場 松山 創
2. 水産用医薬品の適正使用	水技研富士養鱒場 池田卓摩

『水産イノベーション対策推進事業費補助金』の活用を

県庁水産振興課が所管する補助金「水産イノベーション対策推進事業費補助金」の紹介です。

本補助金は『水産業者等の”新たな取組”へのチャレンジの促進』を目的とし、その実現に必要な物品取得の他、イベント開催や販促・広報活動など、広範囲の取組へ助成が受けられます。また、関係の県域団体（県漁連・信漁連・内漁連）による申請支援もあり、アイデアの具現化に悩む方も“まずは相談”から始めることも可能です。『アイデアはあるが初期投資や具体化のハードルが高く実行に踏み出せない』とい

った方には、ぜひとも活用を検討してもらいたい事業です。当該管内では事業開始から下表の取組が当該補助金でスタートしました。

申請受付は年度当初のため前年度からの検討が安心です。次年度の活用を希望される場合は、今年度中に先述の県域団体か富士養鱒場の普及指導員へご相談ください。

助成制度は数多ありますが、自ら動かなければ獲得はできません。新たなチャレンジを支援する本補助金を有効活用してみませんか。

(池田卓摩)

業種	取組内容
内水面養殖	鮮魚一次加工設備の整備 加工品製造機器の導入 池清掃用機器の導入
内水面漁業	溪流魚特定区の設置・運営 アユ産卵場造成＋広報イベント開催

富士養鱒場の降水量と湧水量

月	降水量（降水日数） ：mm（日）		湧水量：万トン/日	
	今年	過去平均*	今年	過去平均*
5	331 (13)	230 (11)	4.62	4.68
6	274 (15)	249 (14)	6.06	5.08
7	491 (15)	381 (16)	9.36	7.14

* 前年以前の20年間平均値

日誌

令和3年5月	令和3年6月	令和3年7月
3日 輸入水産動物着地検査（県内）	2日 マダイ中間育成担当者会議（沼津）	1日 伊豆地域巡回
10日 内水面漁協監視員研修会（沼津）	3日 岳南地下水協議会総会（富士）	2日 栽培漁業基本計画事務局会議（静岡）
11日 伊豆地域栽培推進協議会（沼津）	4日 業務連絡会分場長会議（焼津）	2日 県漁業士会役員会（静岡）
13日 猪之頭公園運営協議会（市内）	7日 温水ヒラメ VNN 検査（場内）	5日 業務連絡会分場長会議（焼津）
13日 内水面漁協監視員研修会（静岡）	16日 猪之頭公園運営協議会総会（市内）	12日 水の循環研究会（Web）
14日 県漁業士会役員会（静岡）	18日 養鱒協養殖技術部会（Web）	15日 普及月例会（焼津）
17日 内水面漁協監視員研修会（浜松）	18日 紅富士生産体制強化会議（場内）	
18日 マダイ中間育成担当者会議（Web）	18日 普及月例会（焼津）	
20日 普及月例会（焼津）	23日 養鱒協魚病部会（文書）	
21日 養鱒協運営委員会（Web）	28日 富士養鱒漁協通常総会（市内）	
25日 伊豆地域巡回	28日 養鱒研修会（市内）	
26日 技術連絡協議会（焼津）	30日 県かん水協会会議（沼津）	